

機関番号：12701

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19520332

研究課題名（和文）生成文法の極小理論における統語上の連鎖の役割と解釈メカニズムについての研究

研究課題名（英文）Research on the Role and Interpretive Mechanism of Chains in Syntax within the Minimalist Program of Generative Grammar

研究代表者

R・A Martin (R・A MARTIN)

横浜国立大学・環境情報研究院・准教授

研究者番号：30302342

研究成果の概要（和文）：研究成果の概要（和文）：本研究プロジェクトは、形成と解釈の両面から、連鎖に不可欠である様々な本質を明らかにし、統語操作及び統語メカニズムの解明に貢献した。特に、連鎖形成が純粋な統語操作によるものであり、移動以外に、同一の語彙要素が別々の個体として単一の統語領域に出現した時に、同じ領域に存在する為に、各々の個体の発生を異なる個体ではなく、同一個体が複数回出現したものであると認識した場合にも、連鎖が形成されることを示した。

研究成果の概要（英文）：In this research project, we have shed further light on the nature of chains, making clear a number of aspects of their formation and interpretation. We have argued that chains are bona fide syntactic objects and that chains may arise not only by way of syntactic movement, which creates multiple occurrences of a single lexical selection, but also in cases where the system fails to distinguish between multiple selections of the same lexical item when these selections fall very close together, in terms of a phase-based locality.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：生成文法、ミニマリスト、連鎖、コントロール構文、比較統語論

1. 研究開始当初の背景

(1) 連鎖というのは、意味役割が与えられる基底生成位置と、統語もしくは意味的な要請で引き起こされる移動、又は一致操作などが適用された後の LF での位置とを結ぶものとして構築されるもので、LF にて基底生成で得た意味役割の情報を残すだけでなく、myself などの照応形を解釈するのに必要な情報を与えるものとして重要な役割を担ってきた。以上の観点から、生成文法理論にお

いて、連鎖は歴史的にも理論的にも、統語構成素の解釈に必要不可欠の存在である。

(2) 連鎖の形成と解釈について、生成文法理論当初から様々な提案がなされてきたが、どれも連鎖の出現に関与する移動・一致操作の本質に結び付き、連鎖の本質に迫る確固たる分析は存在せず、それは現在最先端の理論であるミニマリストの枠組みにおいても同様であり、普遍文法の一つとして連鎖を位置づ

ける理論的にも経験的にも広範囲な研究プロジェクトもほぼ皆無である。又、連鎖は基底生成で受ける意味役割の情報と移動後に見られる意図・談話に類した情報という乖離する情報を有する異なる位置に存在する構成要素から成る特異な特質を有するが、いずれの分析もこの事実に対して余り説明を与えていない。連鎖の解釈に関与するメカニズムに対する疑問が根本的に解決されないままである。

(3) 昨今ではHornsteinを始めとした研究者が連鎖（もしくは移動の種類により生じる一部の連鎖）の存在に疑問を抱き、連鎖は虚構の存在物であり、不要であるという主張がなされてきた。しかしながら、経験的にも作用域の曖昧性やコントロール構文など、連鎖により根本から説明されてきた言語事象が多数あることは周知の事実である。このような文脈において、連鎖が存在するか否かは人間の言語、特に意味解釈の大枠を決めるのに非常に重要な議論であり、現代の理論の枠組みにおいて、連鎖の形成・解釈メカニズムを確固たる分析から導き、広範囲の言語事実から普遍文法における連鎖の概念を明確にすることは生成文法理論の方向性及び人間の言語のメカニズムを解明するのに重要なことであり、急務の課題とも言える。

2. 研究の目的

(1) 本研究の主要な目的は、連鎖の形成と解釈のメカニズムを解明することにより、未解明な部分が多い連鎖の本質を明らかにすることにある。

(2) ミニマリストプログラムの理論的観点から、経験的手法で様々な言語（英語、日本語、スペイン語、イタリア語など）における多岐に渡る言語事実を調査することによって、以下にあげる連鎖にまつわる三つの疑問点に詳細な説明及び解答を与えることにある。

①連鎖の存在を示す経験的証拠の所在を具体化する。

②連鎖を構成する言語要素というものを明確にする。

③連鎖の形成と解釈を司るメカニズムについて解明する。

(3) (2)を調べる過程で、下位研究項目である量化詞作用域の曖昧性・選択・再構築効果の性質、コントロールと前方照応の性質・拡

大投射原理、主語の連鎖、主語の解釈の性質、左方周縁領域への移動の性質について吟味し、連鎖の形成・解釈の分析から導き出し、これらの特徴に一定の説明を与えられるかどうか調べることを目的とする。

(4) 連鎖の形成と解釈のメカニズムが言語構造で果たす役割を解明することにより、統語構造を生成するメカニズム、ひいては言語を司るシステムの一部を説明することが最終的な目的である。

3. 研究の方法

(1) 関連する文献及び日英語、スペイン語などを中心に言語データなどの資料を収集し、整理・分析を行った。

(2) 代表研究者及び連携研究者が海外共同研究者と頻りに連絡を取り合い、研究成果について積極的に情報交換を行い、題目によって共同研究を進めた。特に、メリーランド大学のUriagereka教授は本学に3週間滞在し共同研究を精力的に進め、Boeckx教授も国内にて度々面談を行い、情報提供を受けた。

(3) 毎年、海外から関連する研究を行っている第一線で活躍する研究者及び国内研究者を招聘し国際シンポジウムを開催し、様々な角度から本研究プロジェクトを精査し、内容を深化させた。

(4) 年に数回、研究代表者及び連携研究者が研究会を主催し、進行中の研究及び研究成果を発表し、個々の成果を詳細に検討し発展させた。

4. 研究成果

(1) 日英語のコントロール構文においてコントロールする統語要素とPROが連鎖の存在を示しているという帰結を得て、同一要素が複数の意味役割を担う場合、連鎖の概念が重要な役割を果たしている可能性を示し、連鎖が存在する経験的証拠があることに対して、一定の示唆を行った。又、Uriagereka教授との共同発表において、再構築現象を用いて連鎖の存在を検証し、移動先と基底生成した元位置における量化詞解釈の解釈優位性を通して、連鎖の解釈メカニズムの性質を探り、量化詞は移動先での解釈に優位性が見られるが、一定条件下で量化詞が元位置でも解釈優位性を示すことが明らかになり、再構築現象が連鎖の存在を強く示唆する証拠になるという成果が得られた。以上の結果から、連鎖というものは広範にわたる言語事象を説明するのに必要不可欠であることが説明でき、連鎖を排除する分析からはこの二種類の

言語事象を説明することは難しく、最近のミニマリストの枠組みで全く異なる性質を示す言語事象を説明できるという点でも、理論の発展に寄与する貴重な成果であると言える。この結果を基に、他の言語事象に連鎖が同様な形で関与するかどうか引き続き調査して連鎖が存在する経験的証拠基盤を補強する必要がある。

(2) 連鎖形成には一致操作という基礎的な統語操作が関与していることを示し、連鎖が一致現象の一つであり、連鎖は一致という基礎的な統語操作の本質から派生され、言葉の根本を成すものであると同時に、連鎖を構成する要素が一致に関与する要素であることを提言し、連鎖及び連鎖形成が一致操作に基づいて定義されるという分析を提示した。従来は先行詞と PRO の関係が決定的な説明がなかったコントロール構文においても、一致操作の結果による連鎖の形成が重要な働きを示し、コントロール構文が連鎖の性質を如実に示すものであるという分析を推し進め、コントロール構文の性質の一端を明らかにすることにも成功した。この分析が他の様々な言語事象に適用できるか、多様な言語に渡って調べ、連鎖の形成・解釈の普遍性を証明していく予定である。

(3) Uriagereka 教授との共同研究の中で、連鎖の構成要素と連鎖の解釈について一致操作を基にした分析を提案し、同一の語彙要素の個体が一致操作を含む移動などにより統語領域全体で複数回出現する時に連鎖の構成要素となることを示した。上記のように定義することにより、同一の語彙要素が別々の個体として単一の統語領域に出現した時に、同じ領域に存在するために、各々の個体の発生を異なる個体ではなく、同一個体が複数回出現したものであると統語メカニズムが認識した場合にも、連鎖が形成されうることが説明し、連鎖形成について深い示唆を与えた。更に、再構築現象と結び付けた連鎖を精査することにより、「量化詞作用域の曖昧性・選択」と深く結びついた連鎖の解釈では統語構造処理に関連する認知メカニズムに関与する可能性があるという研究成果が得られ、連鎖の構成要素と連鎖形成メカニズムについて、一定の割合で明らかにすることができた。この移動以外で起こる連鎖形成が観察される範囲を精査し、どこまで統語メカニズムがこの種の連鎖の適用範囲を定めた上で、認知メカニズムとの関係を徹底的に研究する必要がある。

(4) (1)から(3)の結果を導いた一連の研究を通じて、連鎖形成に統語計算メカニズムに必須の一致操作が関与しており、連鎖形成を

導き、コントロール構文を含め複数の意味役割を伴う連鎖形成にも同様の分析が適用できることを示して生成文法の理論研究に新たな示唆を与え、多大な成果を得た。又、4年間に渡る国際シンポジウムの講演・発表及び先行文献や言語データなど言語資料の蓄積された知見から、どの言語でも存在が自明である可能性があることを示し、統語メカニズムにおける連鎖の役割を明確にし、連鎖の普遍的性質の解明に示唆を与えた。引き続き、幅広い言語から多種多様な言語データを集めることにより、連鎖の形成・解釈メカニズムの分析を進展させ、連鎖が普遍文法において重要な役割を担っているかどうか検証する。

(5) 連携研究者である遠藤を中心に、海外共同研究者である Rizzi 教授が率いる共同プロジェクトの一環である統語構造図作成計画に従事し、日本語の文末に観察されるモード・モーダルを表す助詞・助動詞などが表出する右方周縁領域を中心に、これらの助詞・助動詞が位置する機能範疇の所在を明らかにした。その結果、この種の右方周縁領域に属する機能範疇への移動が、ロマンス諸語の左方周縁領域への移動と同様に、統語特有の局所性の原理及び素性の存在が関与していることを示し、この種の統語現象における連鎖の役割についても、一定の示唆を与え、日本語がロマンス諸語と同種の統語構造図で扱える可能性を証拠立て、日本語の周縁領域で観察される言語事象を他言語同様に説明されることを示し、共同プロジェクトに貢献した。同時に、連鎖形成が統語構造を派生する中で行われていることに対して有力な証拠を提示し、連鎖の存在とともに統語計算メカニズムの解明に一端の光明を灯した。今後は周縁領域に見られる移動及び一致操作が本研究プロジェクトにおける連鎖形成及び解釈メカニズムが適用できるか、検討する必要がある。

(6) 連携研究者である藤井が行った日本語のコントロール構文における移動分析の研究により、日本語のコントロール構文の性質と分布について、一定の知見を得た。特に、日本語の名詞節を中心にコントロール構文と移動の関係、それに関わる連鎖形成について明らかにし、英語のコントロール構文の移動分析との類似性を指摘するなど、コントロール構文における連鎖形成と連鎖の存在の由来を具体化し、比較統語研究の深化に寄与した。今後も日本語を比較研究することで、本研究プロジェクトの連鎖の形成及び解釈のメカニズムについて幅広い見地から検証が可能になる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 12 件)

- ① 遠藤喜雄、話し手と聞き手のカートグラフィック、言語研究、136 巻、93-120、2009、査読有。

[学会発表] (計 28 件)

- ① Roger Martin, Control as Uniformity, 日本英語学会国際春季フォーラム, 2009/4/26, 奈良女子大学.
② Roger Martin and Juan Uriagereka, Uniformity and Collapse, Ways of Structure Building Conference, 2008/11/14, University of the Basque Country, Vitoria-Gasteiz, Spain.

[図書] (計 3 件)

- ① Tomohiro Fujii (他 15 名と共著), John Benjamins Publishing Company, Movement Theory of Control, 2010, 211-214.
② Roger Martin and Juan Uriagereka (他 72 名と共著), University of the Basque Country Press, Gramatika Jaietan: Patxi Goenagaren Omenez, 2008, 561-572.
③ Yoshio, Endo, John Benjamins Publishing Company, Locality and Information Structure: A cartographic Approach to Japanese, 2007, 245.

[その他]

ホームページ

<http://www.ling.ynu.ac.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

R・A Martin (R・A MARTIN)

横浜国立大学・環境情報研究院・准教授

研究者番号：30302342

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

遠藤 喜雄 (ENDO YOSHIO)

神田外語大学・教授

研究者番号：50203675

藤井 友比呂 (FUJII TOMOHIRO)

横浜国立大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：40513651